

コバヤシ伝説、健在なり

ーフィルハーモニックアンサンブル公演を終えて

盛田 常夫

伝説の始まり

ブダペストは「炎の指揮者コバケン」、小林研一郎の聖地。1974年に当地で開催された第一回国際指揮者コンクールで優勝して指揮者としてのキャリアを築いたコバヤシは、一躍ハンガリーのアイドルになった。そう、クラシック界のアイドルである。

当時、娯楽の少なかったハンガリーで、ハンガリー政府が大枚叩いて開催した国際指揮者コンクール。西側から著名な音楽家を審査員として招聘し、国営テレビが4ラウンド1ヶ月にわたる長丁場のコンクールをゴールデンタイムでライブ放送し続けた。否が応でも、ハンガリー中がこの初めての国際行事を一喜一憂しながら観ることになった。欧米から参加した並み居る若手の指揮者を押しのけ、東洋から来た「コバヤシ」が何と一次予選から最終審査にいたる4ラウンドすべてを第一位で通過するという快挙を成し遂げた。体操競技のように、20名の審査員が掲げる点数に国中が沸いた。この1ヶ月で、勝者「コバヤシ」はハンガリーの英雄になった。ガラコンサートはロビーまで溢れる超満員。まさにアイドル誕生だった。

筆者はこの数年後にハンガリーに留学する機会を得たが、どこでも「お前はコバヤシを知っているか」と聞かれるのに閉口した。そして、1987年、フェレンチック亡き後の国立フィルハーモニーは団員の投票によって、コバヤシをフェレンチックの後継者に指名した。

クラシック界のアイドル

ポップミュージックがまだ普及していない1970年代のハンガリーでは、音楽と言えばクラシックか民族音楽だった。オーストリアを中心とする中欧は世界のクラシックのメッカだ。そういうメッカで日本人が活躍できる機会は非常に限られている。にもかかわらず、コバケンがデビューし、ハンガリーのクラシック界のアイドルになれたのは何故か。

ハンガリーの誰もがコダーイやバルトークが好きな訳ではない。コダーイ・メソッドが普及しているとはいえ、ハンガリー人の平均的な歌唱力が高いとは思えない。余程、「カラオケ・メソッド」で鍛えられた日本人の歌唱力の方が高い。しかし、クラシックの世界になると話が違ふ。ハンガリーのオペラハウスはウィーンの国立歌劇場に劣らない歴史をもっている。日本人がいくら歌謡曲やポップスの歌唱力があると言っても、クラシックの歌唱の世界ではハンガリー人歌手の足許にも及ばない。その差は埋めようもない。クラシック音楽の世界では、伝統のあるヨーロッパに肩を並べるのは容易でない。音楽家を統括する指揮者の世界になれば、尚更である。

そういう世界にあって、「コバヤシ」の登場はハンガリーのクラシックファンを一挙に増

やしたと言われる。それほどクラシックに興味のなかったハンガリー人も、連日テレビに放映されるコンクールに釘付けになり、指揮の面白さやクラシックの見所が分かるようになった。それに加え、東洋から来た日本人が欧米の参加者を圧倒したことに、皆、驚嘆した。小林の計算し尽くされた動作、指示、即興に、これまでの音楽世界で観たこともない新鮮さを感じたのだ。そういう聴衆が大挙して、クラシック世界に関心をもつようになった。それも「コバケン」という東洋の指揮者を經由して。クラシックのメッカに惹き起こした大衆革命だったのである。

まさに「コバケン」伝説の始まりである。既成の指揮者はコバケンの指揮の所作に違和感を抱きながらも、その躍動感溢れる指揮振りに感心し、素人の聴衆はクラシックの伝道者として「コバケン」を崇めるようになった。

それから 30 年

1994 年、開業して間もないケンピンスキーホテルで、「小林研一郎ハンガリーデビュー 20 周年」を祝った。第一部では国立オケのメンバーがパートごとに余興演奏を行い、第二部では早稲田大学グリーククラブを含めた「コバケン」一家の演奏が続いた。午後 7 時から深夜まで 300 名の熱気が場を占めた。この様子は 50 分のレビテ番組にまとめられ、繰り返し DUNA TV でも放映された。それからさらに 10 年、2004 年 10 月。ハンガリー科学アカデミーの大講堂で、30 周年を祝う音楽会を開いた。コチシュ率いる国立フィルのメンバーの他、国立合唱団、ハンガリーラジオ児童合唱団、当地で学ぶ日本人演奏家の自主参加や、日本商工会の支援も受け、盛大に祝われた。「コバヤシ」の名声のお陰で、当地の日本人や日本企業は有形無形の利益を受けている。そのことを考えれば、10 年ごとにお祝いするのは当然のお返しのように思う。

ただ、30 年も過ぎると、コバヤシ伝説がフェイドアウトしていく。1974 年当時、小学生だった人々には、まだ MTV に映し出されたコンクール風景を親とともに一喜一憂して観た思い出が残っている。しかし、それより若い人々はコバヤシを知らない。もちろん、親から語り継がれた伝説が生きているはずだが、30 年も経てばもうハンガリーの半分以上の人があの熱狂を知らない勘定になる。

これまで、小林は武蔵野合唱団、早稲田大学グリーククラブなどのコーラスを率いて、当地で国立オケや国立合唱団と共演させている。国立オケも合唱団も定期的に日本公演を行っている。1995 年には武蔵野合唱団が参加して、国立オケがマーラーの「千人の交響曲」をスポーツアリーナで演奏した。野村証券から 300 万円の支援をもらい、この盛大なシンフォニーを実現した。その後も、国立合唱団の渡航費用が不足したために、やはり野村証券に助けてもらったこともある。こうやって、コバケンを通して、日本とハンガリーの演奏家の交流が行われてきた。

今回、小林が指揮したフィルハーニアンサンブルはアマチュアのオケである。もちろん、一口にアマチュアといってもさまざま、立教大学オーケストラ OB を中心とするこ

のオケには、N 響をリアイアした音楽家が各パートの首席に据わり、オケの顧問で現役の N 響メンバーの井戸田さんがコントラバスを担当している。さらに、当地では MAV オーケストラからファゴット、チェロ、コントラバスの首席奏者が加わり、現地で活躍している若手のハンガリー人演奏家や日本人演奏家がサポーターとして加わった。だから単純にアマチュアオケとは言えない。セミプロのようなオケだと言えよう。そこに、日本で募集された合唱団を国立合唱団が支え、ハンガリー人ソリストが全体を締めるという役割分担になっている。

チケットの売れ行きが心配だった。スポンサーや日本人社会へのチケット販売はそれなりに捌けたが、それだけではあの大きな芸術宮殿は埋まらない。残りのチケットは演奏会のコーディネートしている MAV オーケストラが販売し、これをコーディネート料として MAV オーケストラ財団が受け取る仕組みをとったが、どれほど売れているか心配だった。

案の定、公演 2 週間前にチケットの売れ行きをインターネットでチェックしたところ、グラウンドフロアに 300 席の残席があり、2 階 3 階席も 50% 程度の売れ行きだった。これには慌てた。もうコバヤシ伝説は生きていないのか。急いで MAV オケ事務局からグラウンドフロア・チケット 130 枚を買い取り、私が個人で各所に捌くことに決めた。ところが、チケットを引き取った翌日、当地の日刊紙に「コバヤシ、再びブダペストへ」という記事が載った。これで MAV オケ事務局の電話は朝から鳴りっぱなしで、この日 1 日だけで 160 枚の 5000Ft 券が売れ、グラウンドフロアが完売になった。このコンサートのことをコバヤシファンが知らなかったのだ。それから数日の間に残りのチケットが順次捌け、公演前にチケットは完売になった。

チケット販売の仕組み

チケットが完売されても、空席がなくなることはない。さまざまな理由で演奏会に来られなくなる人々が数%は必ず存在するからだ。他方、チケットが売り切れ状態でも、会場に行けばチケットが入手できると期待して来る人々（旅行者を含めて）がそれなりの数で存在する。ハンガリーではこの需給のアンバランスをうまく調整している。

一つは、学生の立ち見席（200Ft）。開演 1 時間前に売り出される。購入には学生証が必要だが、購入してしまえば後はチケットを譲渡することができる。

もう一つは、空席占有チケット。これは開演 15 分前に売り出され、開演時間後から実際の開演までの短時間（5 分～7 分間）に、空席があればそれを占有できるチケットである。このチケットでグラウンドフロアの空席は完全に埋まり、チケットを買えなかった旅行者の多くは学生券を融通してもらい、4 階の立ち席を占めた。

こうして、2 階 3 階の数席を除き、芸術宮殿は下から上まで超満員になった。立ち席分を含めると、120% の入りだった。芸術宮殿がこれほど超満員になるのは珍しいことで、舞台裏の技術者たちも久しぶりのやりがいのある仕事に張り切っていた。まさに、「コバヤシ伝

説健在なり」を思い知らせてくれた。

音楽家泣かせの芸術宮殿

2005年に完成した芸術宮殿は日本円にして300億円ほどの資金を投入して建設された建築物である。2006年には建築のオスカー賞とも呼ばれるFIABCI Prix d'Excellence 2006を受賞した。このホールの音響設計は多数の音楽ホールの設計で知られるラッセル・ジョンソン率いるニューヨークの設計事務所に委託されたもので、中欧で随一の近代的な音楽ホールである。

しかし、このホール、音楽家にはあまり評判が良くない。音響効果に問題があるからだ。我々が耳で聞く音のほとんどが、壁や天井から反響してくる音である。だから、音楽ホールの設計にあたっては、音響効果のシミュレーションが非常に重要だ。同じピアノでも、部屋の大きさや壁の材質によって、音がまったく違って聞こえるが、それは我々の耳に入る音の多くが反響音だからである。音楽ホールの反響音は重層的なものだから、そのシミュレーションは簡単でない。形状美を優先するか、音響効果を優先するかで、ホールの評価も異なってくる。

この芸術宮殿の大ホール（バルトーク国民コンサートホール）の上部の壁は開閉して反響音を調整できるようになっているし、舞台上部には反響用の天井が設置されている。こうした凝った設計でありながら、芸術宮殿では舞台から発せられる音のかかなりの部分が上方に発散していく。リスト音楽院と比較すれば良く分かるが、天井の高さが倍近い。オペラハウスの天井よりも高い。それも舞台真上の天井が高い。こういう構造だと、上に延びる音は反響しないで発散してしまう。発散した音は人間の耳には聞こえない。

この状態は舞台にいる演奏家にも感じられるようだ。小林はこのホールを初めて使った時から舞台上でオケの音が聞こえないと表現していた。今回もリハーサルでもっとエコーが効くように壁を動かさないかと尋ねていた。私自身、何度もグラウンドフロアのボックス席で聴いた経験があるが、ここからだといふ遠い舞台で演奏しているように聞こえる。音が響いて来ず、テレビの画像を観ているような錯覚に陥る。リスト音楽院での演奏会では、オケと聴衆がすぐに一体化できるのに、芸術宮殿では一体感を得るのが難しい。打てば響くという感覚を得られないから、演奏家は困る。

もちろん、座る場所が違えば反響音も違うので、それぞれの場所で違った響きに出会うはずだ。これまでの経験で言えば、グラウンドフロア席は比較的良い（12列目から19列目）が、両端にあるボックス席への音の伝導が鈍い。さらに、2階3階の正面席は最高の席であるはずだが、グラウンドフロアのボックス席のように音の隔離感がある。建築美として優れていても、音楽ホールとして評価すると、二重丸という訳にはいかない。ワーグナーやマーラーなどの大編成のオケでもない限り、強烈な一体感を出すのが難しいホールだと言える。

コバケン・マジック

コバケンにとってベートベン第九番交響曲は特別な意味をもっており、聴く人にとってもコバケン・マジックを感じることができるコバケン 18 番中の 18 番だ。10 歳の時にラジオから流れた第九に涙し、このような素晴らしいものが地上に存在するなら、この世界に生きてみたいという願いが、音楽家としての人生の始まりだった。それからコバケンは何百回もこの曲を指揮してきた。

不遇時代にアマチュアの合唱団を指揮してきた経験から、コバケンの合唱指揮には定評がある。楽器のソリストから指揮者になった人には、これが難しい。ソリスト、合唱、オーケストラの三者を融合させる仕事はコバケンがもっとも得意とする分野だ。とくにアマチュアやセミプロのオケや合唱団を指揮する場合に、それがはっきり分かる。

出来上がったプロのオケを扱うのは難しい。一応は指揮者の言うことを聴く振りをするが、本番では平気で指揮者の指示とは異なる自分たちの音を出してしまうことがある。それに比べ、アマチュアやセミプロのオケは指揮者が少し手を加えただけで変身する。合唱を組み合わせた曲であれば、その相乗効果は非常に大きい。演奏している音楽家たちが、その場で自分たちが一段も二段も飛躍できる感覚を得ることができるし、指揮者はオケを変身させる醍醐味を味わうことができる。「指導し甲斐」があるのは、その音楽集団が「伸びしろ」を持っているからである。経験ある指導者が手を加えることで、「ハァ」とする自己変身を遂げることができる。まさにコバケン・マジックの秘密はここにある。

しかし、誰もがコバケン・マジックを真似できる訳ではない。オケだけでなく、合唱を指揮できる能力、音楽家をうまくおだてながら自分の方向に持ってくる能力、頃合いを見て叱りつけ求心力を発揮させるカリスマ要素。このどれもないとマジックは成立しない。こういう能力は真似してできるものではなく、天性のものだ。

コバケン支援の意味

今回の公演にあたって、ハンガリーでは初めてコバケン公演のスポンサーを当地の日系企業にお願いした。それぞれの企業にスポンサーシップの方針や事情がある。だから、最初から大きな資金提供が得られるとは考えなかった。スポンサー枠を 10 万 Ft から 50 万 Ft に設定し、本社のお伺いを立てなくても可能な枠に設定した。欧米の常識では、10 万 Ft 程度なら会社でなく個人が出すお金である。ただ、1 社 10 万 Ft だと、会場費をカバーするだけで 18 社から集めなければならない。それなら、ハンガリーの大企業に一括してお願いした方が簡単だ。コバケンの公演をスポンサーするハンガリー企業を見つけるのは難しくない。しかし、日本のコバヤシが演奏するのに、それでは経済大国の名前が泣く。だから、日系企業だけをお願いした。

しかし、思ったほどスポンサーシップへの協力を得ることができなかった。もちろん、当地の日本人社会の多くの皆さんにチケットを買っていただき、公演を支える力を得たのだが、資金を集める側から言えば、まとめて支援してくれる大きなスポンサーが欲しか

った。この点で当地の日系企業の皆さんのご理解を得ることができなかったのは残念である。

オペラやクラシック音楽の演奏会はチケット収入だけではコストをカバーすることができない。これは普遍的な真理で、国立フィルの日本公演でも地方開催の場合には、1会場で1000万円のスポンサー資金がないと公演を維持できない。今回の公演の経費は、基本的には日本から来たオケや合唱団のメンバーのポケットマネーから賄われている。一つの公演を維持するために、実に大小さまざまな経費がかかる。当地のスポンサーシップはこの経費を少しでも節約するための手段だった。

ハンガリーにおけるコバケンとは日本を宣伝する最大の武器だし、日本からの文化使節を率いる場合には二重の文化貢献になる。既述したように、当地の日系企業は「コバケン」効果を有形無形の形で受けている。コバケンや日本からの文化使節のお陰で、ハンガリーにおける日本人はヨーロッパ社会に特有な東洋人軽視・侮蔑から免れている。そのことを考えれば、コバケンは当地の日本人社会の守り神のようなものだ。だから、コバケンを支援するというのは、そのお返しでもある。在留邦人や日系企業の一層の支援を期待したい。